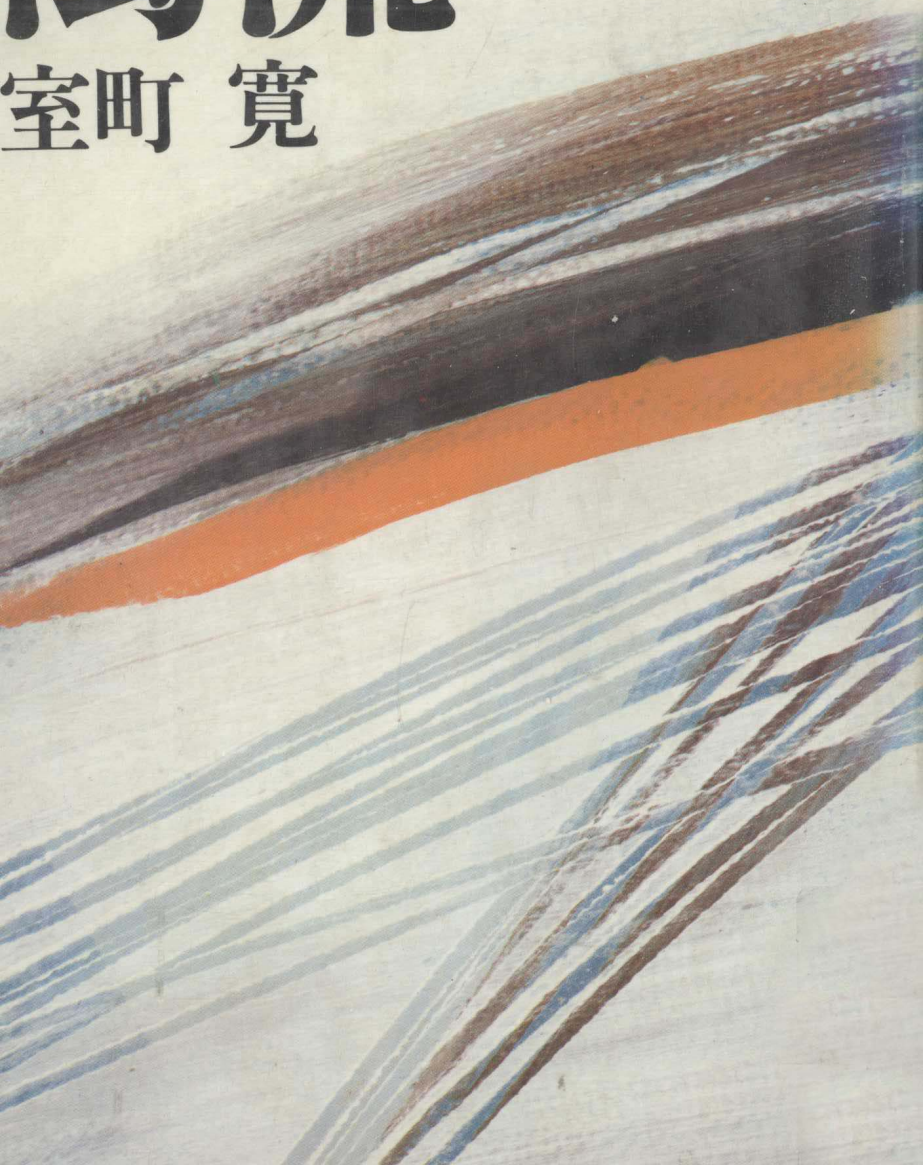


濁流

室町 寛



濁流

室町 寛

濁流

昭和五十四年一月九日 一刷

室町 寛
むろまち かん

著者 室町 寛

© Kan Muromachi 1979

京大(経)卒
某一部上場大企業部長

発行者 黒川 洸

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一―九―五
電話(〇三)三〇三三 振替東京三〇三三

印刷・奥村印刷／製本・大口製本

0093-9737-5825

目次

序章 うねり

第一章 陥穽へ

第二章 反日の論理

第三章 未来距離

第四章 ブラック・ホール

第五章 希望

第六章 罌

第七章 花卉の小径

第八章 日本株式会社

終章 水没

245 226 195 171 153 117 90 57 23 5

装丁
熊谷博人

濁

流

序章 うねり

五月下旬のある日。

その日も、朝から、白熱の太陽が、人々の頭のとっぺんを、まるで焼き鏝を当てたように、ジリジリと焼いていた。

乾き切って、白い土埃が舞い上がるバンコクの中心街は、人と車で溢れている。

毎朝新聞バンコク特派員、白石拓也は、朝九時に、支局のあるスリウオン街を車で出て、いま、ピサヌローク街とラアンルアン街に向けて二股に道路が分かれている手前のペチブリ通りのはずれで、立ち往生していた。オンボロのタクシーや、けぼけぼしく飾り立てたサムロ（三輪車）、それに、乗客が鮎詰めになったバスが、かれの車の前後左右をびっしりと取り囲んでいた。動きがとれないのだ。白石は、先ほどから、口の中で、ブツブツと汚い言葉を吐きながら、一人苛立っていた。

窓を閉め切った車の中は、まるで蒸し風呂だ。鼻血が出そうな感じである。額から垂れ落ちる汗が、白石の太いゲジゲジ眉毛の中で、いったん止まって、少したつと眼の中に入ってくる。白石は、そのたびに眼鏡を外し、眼に入る汗を、何度も腕で拭いた。人一倍、汗をかく体質の白石である。

窓ガラスを閉め切っているのは、ほかの車が無遠慮に吐き出す黒い排気ガスを、避けようとしてのことだった。

が、車内のあまりにもひどい蒸し暑さに、堪りかね、白石は、ときどき、おそるおそる、細目に、ウインドウ・ガラスを下げては、まるで濁った酸欠の水中で、息苦しくなった鯉が、水面に顔を出すように、隙間から風を吸い込むと、また、急いで、車窓を開めたりしていた。

突然、停滞した車の流れのどこかで、クラクションが鳴った。すると、それが蜂起の合図でもあるかのように、白石の車の前後左右で、ブービー、ガァーガァーと、いつせいにクラクションが掻き鳴らされた。苛立った運転手たちが、警笛をめったやたらと鳴らすことで、ささくれ立つ神経を鎮めようとするのだ。だが、こんどは、ほかの車のクラクションで、自分の神経がよけいに苛立つ、といったいつもの光景だった。

暑さに馴れているはずの東南アジアの人々にしてからが、このありさまだ。

警笛の渦の中で、白石は、頭の中が、急に煮え滾ってくるように思えた。

白石は、急いでいた。一刻も早く、ラアンルアン街に入り、ラチャダムノンノック通りへ出なければならぬ。かれは、何度も、呪いの声をあげていた。

と、信号が、青に変わったのであろう。前の方から、潮が引くように、警笛の音が消えていく。

白石は、ゆっくりと車を発進させた。

そのとき、かれの車のすぐ前に、突然、裸足の子供が一人、飛び出して来た。

「危い！」

白石は、思わず、大声をあげて、ブレーキを踏んだ。子供は、手を高く上げて、何かを喚きながら、車の間を猿のように、すり抜けて行った。

何が、不意に、飛び出して来るか分かったものではない。先ほども、白石の運転している車の前や横に、急に割り込んで来た車は、二台や三台ではなかった。

白石の車は、やがて、ラアンルアン通りのスカンジナビア航空の前を過ぎた。

目的の地は、すぐ、眼と鼻の先にある。車の流れも、いまのところ、順調だ。少しほっとした感じになった白石の脳裡に、思考が還ってきた。

バンコクの街の、この無秩序な狂騒。これは、いったい、何を意味するのか？

個人の意志でのみ行動するといわれる、この国の人々である。都市に、現代的システムを持ち込む術を、まだ十分身につけていないことを、それは物語っているのだろうか？ いや、それとも、もっと単純に、暑さが、人々の神経を狂わせ、集団の規律を無視させてしまうのだろうか？

信号が赤に変わった。

白石は、車を止めた。と、それを待っていたかのように、汚れたシャツの胸元をはだけた、みすぼらしい恰好の子供たちが四、五人、飛び出して来た。その中の一人が、白石の車の窓ガラスをコッコツと指で叩いた。オレンジ色のジュースが入ったプラスチック製の袋を下げている。ジュースを買ってくれ、と言っているのだ。

白石は、いらないといった仕草で、首を振った。

その子供が、別の車のところへ走り去ると、こんどは、串だんごをぶら下げたほかの子供が、窓ガラスを叩いた。次に、花束を抱えた子供が走って来た。白石は、そ知らぬ顔で、取り合わなかった。

子供たちは、手当りしだい、あちこちの車に走り寄って、車窓に合図している。

見たところ、誰も買ってやるものがない。一人が買えば、いっせいに、そこへたかって来るからだ。まるで蛆虫のように。

東南アジアの街のいたるところに見られる風景だ。子供たちは、ろくすっぽ学校にも行っていないのだろう。かれらは、さし当り、このバンコクでいえば、クロントイと呼ばれる貧民窟の連中に違いない。子供たちを差配している元締めの下で、日に五時間働き、たとえば、ジュースを八十個売ったとして、子供たちの収入は、一〇バーツ、つまり、邦価で百五十円にしかないといわれているの

だ！

暑さばかりが原因ではない。貧困、それが、根本の原因となつて、この国に、何かが泡立ち、煮え滾っているのだと、白石は思う。

サイゴンが陥落し、ラオスとカンボジアに解放政權が樹立されて以来、ここ一年ばかり、この国のエスタブリッシュメントは、忍び寄る共產主義の足音に、不安を掻き立てられていた。このところ、国の所々方々で、ゲリラ活動が活発化し、労働争議がやけに頻発しているのだ。たとえば、ゲリラ活動。それは、この五月に入ってからでもすでに数か所で見られた。

五月四日。ナンで、陸軍警邏隊がゲリラの待ち伏せ攻撃を受け、三人が死亡、六人が負傷。

同月二十日。ウボンで、国境警備隊のパトロールが、待ち伏せ攻撃を受け、六人が死亡、二人が負傷。

同月二十五日。カラシンとウボンで、ゲリラが攻撃、官吏五人が死亡。

白石が、新聞報道でちよつと拾つてみてさえ、まずそんなぐあいだった。

いま、この国で、ゲリラが跳梁しているのは、全土七十一省のうち三十四省にわたるといふ。その中でも、二十八省には、戒厳令が布告されているというではないか！

政府側の発表によつてさえ、ゲリラ側は、政府軍に対して、かなり効果的なパンチを食らわせているらしい。一九六六年から七六年の四月までの十年間、共產ゲリラとの交戦で、ゲリラ側の戦死者は一、九七九人。これに対して政府側は二、七四六人が殺されたといふ。負傷者にいたっては、ゲリラ側の六〇五人に対して、政府側は、その十倍に近い五、八九三人。『大本営発表』ですら、戦闘では、政府側の被害の甚大さを認めているのだ。

白石は、あらためて、雑沓する街並を凝視した。

ごちゃごちゃと互いにすれ違いながら行き交う、無表情な人々の顔と顔。が、その人たちの群れに

混って、ゲリラがいるに違いない。レボ（連絡係）や、トラック部隊（資金調達係）が！

無表情。隠された任務と思想。白い大根の中味は赤い、赤い大根の中味は白い、とある左翼系の中国人が言っていたが……

そう思う三十六歳の、まだ若い白石の内部に、スリリングで、一種、ロマンチックな感情が去来するのだった。

なにか芝居がかった過剰な連想をしているのではないかと？ 白石は、ふと、そんな自分自身に、苦笑を覚えた。だが、こうした錯覚に陥るのも無理はないのだ。もう四年も、この国に在るといいうのに、結局、自分は、この国のことを何ひとつ分かってはいないのだ。

かれが見る街は、今日も、むやみに混雑してはいるが、それ以上には、なんの変哲もなかった。

ゲリラ。たとえ、かれらが、個々の戦闘で勝っているとはいえ、冷静に分析してみると、タイの軍部にとって替るほどの共産勢力は、実は、まだ、成長してはいないのだ。ゲリラの動員兵力とはいっても、一つ一つの局地戦で、小隊単位の兵力がやっとである。

ゲリラの中心。それがタイ共産党（CPT）であることはよく知られている。だが、かれらの放送、*「タイ人民の声」*にしてからが、まだ微弱な電波を、それも途切れがちに、地下から発信しているに過ぎないのだ。

と、そのとき、後方からの鋭いクラクションで、白石の思考は、突然、中断された。

信号が青に変わっていたのだった。一瞬、出遅れた白石の車を、後方の車が、急ぎ立てていた。

車が、ラアンルアン通りから、ラチャダムノンノック通りに差しかったところで、白石の眼は、手に手にプラカードを掲げた大勢のデモ隊の行進する光景を捕えた。

労働者たちは、腕を空に向けて突き上げ、いっせいに、何かを叫んでいる。

今朝から、白石が追跡しようとしていた取材の対象。それが、このデモ隊であった。

労働者たちは、長蛇の列を組んで、ラチャダムノンノック通りの北東の端にある国会議事堂に向っている。ざっと見て千人はいるだろう。

労働争議が、ここ一か月の間、まるで降ってわいたように、バンコク周辺の各所で頻発していた。異常事態といってよかった。いったい、この争議は、なんなのか？

このバンコクの近辺に、都心からかなり離れたランシット地区、ペカセム地区、それにプラプラデー地区（会話では、ババデー）と呼ばれる大きな産業団地がある。そこにあるほとんど全部の企業が、外資系企業で、それも、日系の合併が多い。その外資系企業の六か所で、申し合わせたように、現在、労働争議が起こっていた。

これまでなら、争議といっても、散発的で、しかもその期間は、長いといわれても、せいぜい一週間。たいがいが一、三日で解決したのに、こんど場合は、それが一挙に多発し、すでに一か月の長期にわたろうとしている。

労働争議。それは、この国の体制と価値観（王制と仏教に対する尊崇という）に対する根本的な挑戦であるといつてよかった。従順であることが、庶民の徳性といわれてきたこの国で、一握りのアカに火をつけられたとはいえ、大衆が、まるで、モノに憑かれたようにいきり立っていた。

サイゴンの陥落と、ラオス、カンボジアの解放以来、このタイにも、共産化のドミノ現象が起こっているのだろうか？

白石は、道路の端で、目立たないように気を配りながら、しばらく、車を止め、国会議事堂に向う大勢のデモ隊を観察していた。

奇妙なデモだ、とかれは思った。

デモ行進は、お義理にも、整然たる行進、といえるものではなかった。

労働者たちは、とくに、列を作るふうでもなく、三三五五、バラバラの塊りをなして、歩を進めて

いる。デモ隊の長い列は、ある部分では、毬のように膨らみ、ある部分では、糸のように細っている。しかも、密集したかと思えば、突然に解け、解けたかと思うと、密集する。まるで、バリウムを呑んだ人間の胃を、X線照射で観察するときのような、自在の運動といってよかった。

労働者たちは、お互いが意識して連帯の歩調を合わせるわけでもなく、一人一人が、自分勝手に歩を運んでいるように、白石には見えた。瞳もそうであった。戦いの決意に満ちて、いつせいに、前方の敵を凝視しているといった眼差ではなかった。一人一人が、勝手気儘なふうで、互いに私語を交しているらしく、前後左右に顔を向けている。

それは、デモ行進というより、祭りかなにかを見物に行く、不特定多数の意思を持った、見物人の集団に似通っていた。

群衆が、横列に展開して、手を繋ぎ、連帯の意志を表明する、あのフランス式デモというのはあるが、これは、タイ式デモとでも呼ぶべきだろうか？

タイ人には、タイ人流の闘争戦術があるらしい。もしかすると、この柔軟な戦術こそ、こんどの長期にわたる闘争を支えている一つの原因かも知れない、と白石は思った。

白石の止めた車から、二十メートルばかり離れたところを、デモ隊の最後尾が、いま、通って行く。

と、デモ隊員の中の一人が、白石の方に向って、ハムスターのようにモグモグさせていた口から、ペッと唾を吐き出した。真赤な血のような唾。白石は、思わず首を竦めた。日本人に向って、憎悪の唾がひっかけられたように、かれは思った。というのも、このデモ行進をやっている労働者たちの争議の対象は、日系合弁企業であったからだ。

デモ隊員の一人が吐き出したのは、この国で、“トン・マーク”と呼ばれる檳榔子の赤い実であった。

白石も、先ほどこから、やけに咽喉が渴いていた。「トン・マプラーオ」の汁が飲みたい、とかれは思った。椰子の実のジュースである。実の頭部を円錐型に割り、それを冷やしておいて、上部に穴を開け、ストローを突っ込んで飲む。慣れると、けっこう、いい味がする。

白石は、ねばった唾を飲み込みながら、ゆっくりと車を進めた。

デモ隊の後尾を追って、数人の半裸の子供たちが、猿の鳴くような声を立てながら、走っている。道を行く大人たちは、デモなどには、まるで関心がないらしい。天秤棒の両端に吊り下げた籠の中に、果物を山盛り入れて、黒いボロを纏った、顔中皺だらけの老人が、ヒョヒョイと弾むような恰好で、過ぎ去って行った。

白石は、車のスピードをあげた。バドン・クルン・カセム（運河）を渡ると、あまり、人通りはなかった。

白石の車からは見えないが、総理府を過ぎたあたりのどこか左手に、大理石寺院と呼ばれる寺院があるはずだ。切妻造の屋根に葺かれた黄金色の中国瓦が、白い大理石で出来た柱や壁と調和して、目映く光り輝く寺院。

白石は、この大理石寺院に、これまで何度も足を運んだ。礼拝堂の入口を守る二体の白い獅子像。暗い本堂の中に鈍い光茫を放つ釈迦像。それに、回廊に安置された五十体を越えるという、さまざまな仏像。

タイの寺院には、日本の仏閣のような、あのわびやさびの静謐はない。すべてが豪華絢爛としている。権力の威光の象徴。南方民族特有の輝く太陽の下での楽天性。

なぜか、白石には、デモ隊の姿態の中にも、共通の楽天性があるように思えた。

スリーアユタヤ通りを横ぎり、ラマ五世像のあたりで、白石の車は、デモ隊の先頭を追い越した。かれらより一足先に、国会議事堂前の広場に行き、ラチャダムノンノック通りの北東の端で、車を止

めた。そのあたりに、七、八台の高級車が並んでいた。

しばらくして、白石の眼の前を、デモ隊の先頭が、プラカードを空に向けて突き上げながら、通り過ぎた。かれらの歩調は、相変らず、バラバラだった。

百人ほどのデモ隊の団が、国会に向けて右手の方角に当るカオデイン動物園のおい繁った樹林の方へ、行進して行った。

一団は、その樹林を背景に、ガヤガヤいいながら、坐り込みを始めた。これからピクニックの弁当を開くともいった恰好で、互いに私語を交しながら、最後尾のデモ隊の到着を待っているらしかった。

五十分。あるいは一時間以上の時間が経過していたかも知れない。芝居の進行ののろくさに苛立っている自分を感じ、白石は、苦笑を洩らした。

こんな争議の中に巻き込まれた、あのタイテックス社社長の戸崎さんも大変だ、とかれは思った。戸崎が、安藤商事大阪本社から、このバンコクの合弁会社に転勤して来たのは、この年の二月の末。

タイ国の西も東も分らない戸崎に、突然、予期もしない争議という災難が降ってわいたのだ。

このバンコクに、もう四年もいる白石にしてからが、こんどの争議の結末を見通すことはむずかしい。

アジアの国とはいっても、このタイという国で、物事の転変を予測するには、違った尺度がいる。アジアと呼ばれる広大な地域に住む人々に、もし、なんらかの共通性があるとすれば、それは、ただ、黄色人種としての皮膚の色だけに過ぎないであろう。それ以外は、何もかも、すべてが異質なのだ。

白石は、坐り込んだデモ隊を見ながら、ふと、そんなことを考えていた。集会が開かれるらしい。

労働者のほとんどが到着しおえてから、芝居の幕が上がるのに、十分以上が経過している。

やっと、一人のリーダーらしい男が、国会の方を背にして、立ち上がった。褐色の顔をした男であった。男は、ラウド・スピーカーを右手に持ち、キンキンした甲高い声を震わせながら、アジ演説を始めた。

男の演説は、ひどく早口で、白石には、そのタイ語の内容が、ほとんど聞き取れない。演説は、五分ほど、続いた。最後に、男が、言葉を、一つ一つ区切りながら、ゆっくり、しかも、力を込めて叫んだとき、白石にも、その言葉は理解できた。

「タイテックス社の、日本人経営者を、交渉のテーブルに、つかせるよう、政府は斡旋しろ！」
タイテックス社の日本人経営者。それが、白石にとって、大学の先輩である戸崎を指していることは、いうまでもなかった。

政府は斡旋しろ、と言ったリーダーの声に合唱して、坐り込んだ千人余りの労働者のシュープレヒ・コールが、いっせいに響^{どよ}動み、労働者たちの拳が、林のように、天空に向けて突き上げられている。

労働者たちが、いま、はじめて、整然とした秩序と、闘争の意志を顕わしたように、白石には思えた。

のろのろとしたアジア人が立ち上がったのだ。白石は、妙な感動を覚えた。

拍手が湧き、あちこちで、甲高い金属性の声が飛び交ったとき、騒然たる雰囲気の中に、華やいた感じがあった。白石は、そのときになって、労働者の半分以上が、女性であることに気付いたのだ。

国会広場に、一瞬、静寂が支配した。

と、別の一人の男が、勢いよく、弾かれたように、立ち上がった。その男は、先ほどの褐色の顔の